

階層秩序と自己実現の両立性 —希望と評価のエスノメソドロジー

経済総合分析株式会社 木下博之

1. 序

本論考で論じる、「階層」とは、「意味」的なものである。経済的豊かさという面においては、それは「生存」という基本的問題であるため平等であることが望ましいと考える。

2. 概論

社会的期待値は、均衡値（規定値・平均値）として、社会的秩序を形成している。ある個人への社会的評価が、期待値を、上回ったり、下回ったりすることで、社会から好評（承認）や不評（不承認）を得る。それは、その個人の個人的希望が、社会的期待値を上回るか否か、という問題でもある。また、被評価者である個人もそれを予測し行動をとる。

3. 社会的評価の形成と変化

＜論点＞社会を形成する要因とは何か → 「権威」の多寡

（例）社会秩序形成において主要な要素とは何か

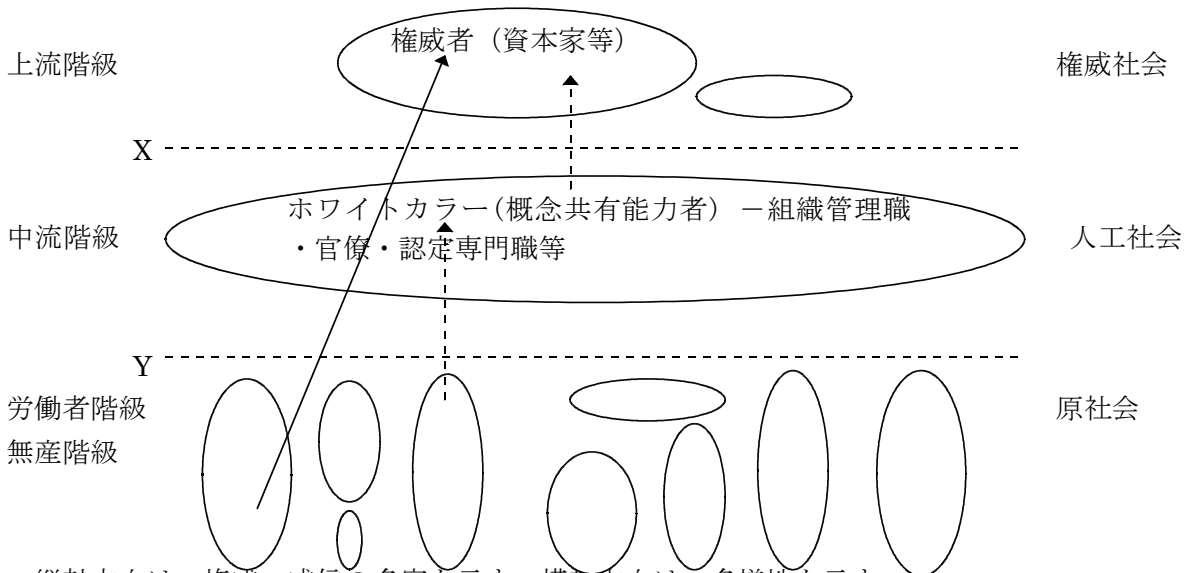
社会的評価の形成において主要な要素とは何か

パターナリズムの是非

秩序維持か新しい可能性の発掘か

4. 社会階層概念

希望値、期待値は、階層間で分化している。



縦軸方向は、権威・威信の多寡を示す。横軸方向は、多様性を示す。

図中の楕円は、共同体（エスニシティ・カテゴリ）を示している。

「原社会」層は、生得性、地域性等に依存し、多極性を持つ。

分断線 X を乗り越える主な方法は、「資本蓄積」。経験、地位などの蓄積の意。

分断線 Y を乗り越える主な方法は、「学歴」の取得（大学卒）による、「権威」と「実力」の獲得。

上位者が、下位者の生活を工面する構造がある。

支配、被支配の構造が生まれる。権威主義・自由主義・社会主義の棲み分け。

ただし、破線のような階層移動を活発にすべき。

このモデルは、組織、国家社会、人間社会全般などの何れの規模においても成立しうるものである。

5. 対立構造か分立構造か 抽象か具体か

普遍的価値観
流動性

局所的価値観
保護性

地方と都市の一元化は困難

自由主義と保護主義の均衡点を探るべき

対話的パターンリズム

(例) 知的欲求对生活欲求

	知的欲求	生活欲求
分断線 Y 以上	①	②
分断線 Y 未満	③	④

②、③の人は何を望んでいるか → (論点2) 個人的階層移動は受け入れられるべき

①、④の人は何を望んでいるか → (論点1) 階層は人為的に解体されるべきでない

6. 論点

1. なぜ、階層は人為的に解体されるべきでないか

階層化は、自然発生的な現象であると、歴史的推移から考えられる。また、大半の構成員も、自己の所属する階層を「社会」として受け入れている。階層の解体により、大半の構成員は、自己の帰属心を満たすことができなくなり、社会の持続可能性を低迷させうる。

2. なぜ、個人的階層移動は受け入れられるべきであるか

構成員が個別的に階層移動を望むのは、その個人がその階層に所属し続けることに問題を感じたからである。階層上昇(下降)により、個人的問題は解決されうる。そうした個人は、上昇(下降)志向的感覚の持ち主であると考えられる。階層上昇が認められなければ、個人的に不満を感じつつ社会生活を送ることになり、階層ひいては社会に負の感情をもたらす要因となる。階層上昇が認められれば、個人的な不満・不安は解消し、能力を社会全般に生かそうとする。そのことにより、社会に正の貢献がもたらされる。現状においては、個別的な階層移動に対して、社会により、硬直的、否定的な判断が為されがちであるが、その是非は、より妥当かつ柔軟に判断されるべきである。

7. 方策

- ・階層の解体、一元化を理想化しない
- ・階層間の断絶を前提とした、社会安定化策。
- ・階層上昇(下降)を望む個人の自由を阻まない、規則、機運作り。

8. 結論

階層構造を維持しつつ、個人的階層移動が社会的に容認されることで、社会の安定と個人の期待の実現は両立する。持続可能社会(社会の持続可能性)と個人的願望実現は同義であり、両立可能である。社会全体、個人どちらの視点からも、状況は好転する。

<参考文献> ライト・ミルズ『社会学的想像力』 『パワーエリート』 『ホワイトカラー』
ガーフィンケル(他), 1987, 『エスノメソドロジー』, せりか書房 ポール・ファッセル『階級』
西原 和久, 1998, 『意味の社会学』, 2003, 『自己と社会』 直井 優 (編), 2008, 『講座社会学 13 階層』
吉川 徹, 2009, 『学歴分断社会』, 2001, 『学歴社会のローカル・トラック』, 2007, 『階層化する社会意識』